

# 吳秀三先生

齋藤茂吉

青空文庫



故正岡子規先生の『仰臥漫録』は、私の精神生活にはなくてかなわぬ書物の一つであつた。

『仰臥漫録』の日々の筆録が明治三十四年九月に入つて、「病人の息たえだえに秋の蚊帳」とか「病室に蚊帳の寒さや蚊の名残」とか、「糸瓜へちまさへ仏になるぞ後おくるな」などというあわれな句が書いてあるようになって、その廿三日のくだりに、

九月廿三日。晴。寒暖計八十二度（午后三時） 未明二家人  
 ヲ起シテ便通アリ。朝。ヌク飯三ワン。佃煮。ナラ漬。胡桃くるみ  
 飴煮。便通及繃帶トリカへ。腹猶張ル心持アリ。牛乳五合コ  
 コア入。小菓数個。午。堅魚かつおノサシミ。ミソ汁実ハ玉葱たまねぎト

芋。粥三ワン。ナラ漬。佃煮。梨一ツ。葡萄四房。間食。牛乳五合ココア入。ココア湯。菓子パン小十数個。塩センベイ一、二枚。夕。焼鱈いわし四尾。粥三ワン。フヂ豆。佃煮。ナラ漬。飴二切。巴里パリ浅井氏ヨリ上ノ如キ手紙来ル。

こう書いてあつて、そのうえの方にワットマン紙の水彩絵ハガキが張りつけてある。川の水が緩く流れていて、黒い色の目金めがねば橋しが架かっている。その橋が水に映っているところである。その向うに翠みどりの濃い山が見えて、左手には何かポプラアのような木が五、六本かいてある。その余白に「ほととぎす著。昨日虚子君の消息を読み泣きました。この画はグレーといふ田舎の景色なり御病床の御慰みまで差上候。木魚生」とあり、それから「只今は

歸りがけに巴里によりて遊居候その内に歸朝致久ひきしづり振にて御伺  
 申すべく存候御左右その後いかなされが被為入候哉や。三十四年八月十八  
 日くれ呉秀三」とあり、その他に和田英作みつたにくにしろう満谷国四郎氏も通信してい  
 る。正岡先生はこの絵ハガキを『仰臥漫録』と簽せんした帳面に張り  
 つけて朝な夕なにながめておられたのであつた。私は計らずも故  
 正岡先生と呉先生との精神上芸術上のこの交渉を見出いだして、不思  
 議な因縁のつらなりに感動したのであつたことを今想起する。

よう 呉先生の歐洲留学に出掛けられたときの諸名家の送別の詩歌しいかち  
 帖を私は一度先生の御宅で拝見した。それは長風万里と題した  
 帖であつて、その中に正岡先生の自筆俳句がある。「瓜茄子命うりなすびが  
 あらば三年目」というのである。正岡先生はこの時既に病の篤あつい

のを知っておられた。三年の後呉先生の帰朝されて再び面会された時、相互のその喜びその憂い誠に如何いかであつたらうか想像に余りあることである。

私がいまだ少年で神田淡路町の東京府開成中学校に通っているころである。多分その学校の四級生へ今の二年生ぐらゐであつただらうか。学校の課程が済むと、小川町どおりから、神保町どおりを経て、九段近くまでの古本屋をのぞくのが楽しみで、日の暮れがたに浅草三筋町みすじまちの家に帰るのであつた。ある日小川町通の古本屋で『精神啓微』と題だいせん簽した書物を買つて、めずらしさうにひろい読みしたことを今想起する。その古本屋は今は西洋鞆ばん鋪（旅行用鞆製造販売）になり、その隣は薬湯（人参実母散薬湯

稲川楼) になつてゐる。『精神啓微』は呉先生がいまだ大学生であつたところに書かれたもので、初版は明治二十二年九月廿日の刊行である。その後私が第一高等学校の学生になつた時、本郷のある書舗で、『精神啓微』の第二版を求め得た。第二版は明治二十三年十月十日の刊行で、表紙の字が初版よりも少し細くなつており、卷末に世評一般がのせてあつて、その中には『国民の友』記者の評に対する森林太郎先生の弁駁べんぱく文などもある。

『精神啓微』は脳髓生理から出発して形而上学の諸問題に触れ精神の本態に言及されたものであるが、「万象ヲ鑒識かんしきスルノ興奮ハ視官ニ於テ最盛ナリ。光線ノ発射ト色沢ノ映昭トハ吾人ノ終身求メテ已マザル所ナリ。耳モ亦之ニ同ク、響ト音トハ其常ニ欲ス

ル所タリ。光ヲシテ絶無ナラシメバ聴覺ノ困弊果シテ如何<sup>いかに</sup>。天地皆暗ク滿目冥<sup>めいめい</sup>冥<sup>めいめい</sup>タラバ眼ナキト別ツベキナク、万物尽静ニシテ千里<sup>しやうじよう</sup>蕭<sup>しやうじよう</sup>条<sup>じよう</sup>タラバ耳ナキト別ツベキナシ。何ヲ以テ吾人ノ心情ヲ慰スルニ足ランヤ」というごとき莊嚴簡淨の文体からなつていたので、いまだ少年であつた私がいたく感動して、著者である吳先生の名を今でもよくおぼえていることは、極めて自然的な心の過程であつたような気がしてならない。

『精神啓微』の初版を買つてから幾年ぐらい経つてからであつたろうか。私は富山房発行の『人身生理学』へ明治二十六年九月十日初版発行をを買つた。当時私が良教科書として尊敬しておつた所の五島清太郎氏著『中等動物学教科書』白井光太郎氏著『中等



植物学教科書』 山やまがた県正雄氏著 『中等生理学教科書』 へ以上三書

共に金港堂発行ゝなど以外に、『人身生理学』を求め得てひどく

喜んだことを想起する。『人身生理学』は中学校程度の教科書と

しては甚はなはだくわしいもので、そのころ知識欲さかんの熾さかんであつた私の心

を刺戟しげきしたのみでなく、その文章はたとえば、「作業ノ健康ニヨ

キハ其休止ト適當ニ交代スルニアリ。精励勉強ノミアリテ逸予休き

竭ゆうけつ ナケレバ精神身体共ニ頹たいはい廢スベシ」。あるいは、「人既

ニ生ルレバ皆各其體質アリ。筋骨強堅ニシテ肩広ク胸きようぢう 膺大ニ

毛髮そうせい叢生シ、膚色潤沢ニ齒整かつヒ且強ク、臟腑善よク發達スルモノ

之これヲ強壯ノ體質トシ、之ニ反スルヲ羸るいじやく弱ノ體質トス」などと

いうが如きものであつて、いまだ見ぬ著者呉先生を欽慕きんぼする念の

募りいたることは推するに決して難くはない。

ある時また私は、『人体ノ形質生理及ビ将護』という合本講義録を買い得た。どこの講習会で講ぜられたものか。明治何年ごろに講ぜられたものか。もはや今の私には分からないが、はじめの方で男子の形態を記載した条に、くだり「稜々トシテ鋭シ」の句があり、脳髓を説かれた条に、「大脳ハ精神ノ物質的代標タリ」とあるのを、私は忘れずにいた。今春吳先生を祝いまつる会に参列するために、私は東京に帰つて来て、中学校時代のいろいろの書をさがしたが、大方は売ってしまったのに、不思議にもこの講義録は行李こしりの隅の方から出て来た。そこでしらべてみると、「女子ニハ皮膚下ノ脂肪ふせん富贍ナルガ為ニ形態豊満ニシテ、男子ニ

ハ筋肉腱骨ノ強大ニシテ挺起スルガ為ニ其形態稜々トシテ鋭シ」といふ文章であつた。いまだ少年であつた頃の私が紅鉛筆で標を打つてある文章の一つに、「精神的養生ト云ヘルモ亦然リ。整然タル休養ヲナシツツ絶エズ習練スルコト最モ須要ナリ。知覚ノ能ハ実歴親験ノ重ナルニ随ヒテ長ジ、記憶ノ能ハ同一ノ観像ヲ屢反復スルニヨリテ長ジ、弁別ノ能ハ原因結果ノ比較ヲ屢スルニヨリテ長ズ。他ノ高等精神作用亦皆習練ニヨリテ育成セラルルコト此二同キモノナリ」といふのがあつた。此の如く呉先生の著書の幾通が偶然か否か私の手に入つたためか、その頃まだ少年であつた私が未見の呉先生に対する一種の敬慕の心は後年私が和歌を作るようになつて、正岡子規先生の著書を何くれとなく集め出した頃

の敬慕の心と似ているような気がする。私の中学校の同窓に橋健行君がいて、橋君が私よりも二年はやく呉先生の門に入ったということも、私に取りては極めて意味の深いことである。

明治三十五年の秋頃か、明治三十六年の春のころかに、第一高等学校の前庭で故第一高等学校教師プッチール氏 Fritz Puzier

(1851-1901) の胸像除幕式が行われた。その時第三部一年生であつた私がおおぜいの生徒らの後ろの方に立って、式が行われるのを見ていた。独逸<sup>ドイツ</sup>公使伯爵ワルライ氏 Von Arco Valley <明治

三十四年から明治三十九年まで独逸公使であつたの演説があり、当時の第一高等学校独逸語教師メンゲ氏 Menge の演説があり、第三部三年生からは片山久寿頼氏、二年生からは関口蕃樹氏など

が、生徒代表者として出て、何か言ったのであったが、独逸公使の次に額ひろく、眼光鋭く、鬚ひげが豊かで、後年写真版で見たニイチエの鬚のような鬚をもったひとりの学者が、プッチール氏から教を受けた人々の総代として独逸語で演説された。私のそばにいた三年生のひとりが、「あれは呉博士である」とおしえてくれた。『精神啓微』『人身生理学』『人体ノ形質生理及ビ将護』などの著者を私はその時はじめて目のあたり見たのであった。そして私は目を睜みはつてふかいなつかしい一種の感動をもつて瞬時も免のがすまいとしてその人を見たのであった。

明治三十九年七月はじめから法医学教室の講堂で先生の心理学講義があつて、七月十一日に終了した。その時私ははじめて先生

の講義を聴いたのであった。また先生の助手として森田正馬さんなどが、その席にいて、私は西洋語の綴<sup>つづり</sup>方<sup>かた</sup>を訊ねたりした。私はもう医科大学の二年生になろうとしており、父上が独逸から帰って精神病医として立っていたのであるから私が先生の門に入る機縁はそのあたりから形成されていたのである。私は学生として先生の講筵<sup>こうえん</sup>に出席している間に『精神病学集要』・『精神病学要略』・『精神病鑑定例』・『精神病検診録』・『精神病診察法』等の書物を知り、傍ら『柵草紙<sup>しがらみ</sup>』の文章や医学雑誌（『中外医事新報』）に連載された徳川時代の医学という論文などを読んで見たりした。

明治四十三年十二月のすえに卒業試問が済むと、直ぐ小石川<sup>か</sup>駕

籠町ごまちの東京府巢鴨病院に行き、橋健行君に導かれて先生に御目にかかった。その時三宅先生やその他の先輩にも紹介してもらった。明治四十四年一月から、いよいよ先生の門に入り専門の学問を修めることとなったのであるが、先生の回診は病室の畳のうえに据わられて、くどくどと話す精神病者の話を一時間にも二時間にも聴いておられた。それがいかにも楽しそうで、ちつとも不自然なところがない。私は先輩の医員の後ろの方から、先生の如かくの ごしき 是態度を視のぞきみ 見ながら、先生の「問診」がすなわち既に「道」を楽しむの域に達しているのではなからうかなどと思ったことを今想起する。私は先生の教室に入れていただいたから、既に十年を経過した。先生莅りしよく 職廿五年の祝賀会を挙ぐるにあたって、先

生の偉大さ先生の本質を申す者には、同門の先輩中その人に乏しくはない。門末の私が先生について敢て論讚あえにわたる言をなすのは、おのずから僭越せんえつの誚しやうを免れず、不遜の罪を免れぬであろう。私はただ少年時における私の心持を想起し、それを記して、謹んで先生を祝福する。（この文章は大正十年二月長崎において稿を起し、十一月一日熱田丸船上にて書おわったものである）



# 青空文庫情報

底本：「日本の名随筆 別巻43 名医」作品社

1994（平成6）年9月25日第1刷発行

1999（平成11）年8月25日第2刷発行

底本の親本：「斎藤茂吉随筆集」岩波書店

1986（昭和61）年10月初版発行

※二行に渡り小書きになっている箇所は、◇で囲いました。

入力：門田裕志

校正：氷魚、多羅尾伴内

2003年12月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 呉秀三先生

斎藤茂吉

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>